

民族表象と経営 ——中国ミャオ族／モン「文化伝承保護館」の取り組みから——

宮脇 千絵

キーワード

民族文化、表象、経営、ミャオ族／モン、雲南省

1. はじめに

中国雲南省文山チワン族ミャオ族自治州硯山県のX村に、「ミャオ族文化伝承保護館」と称する施設が2015年12月に開館した。立派な四合院様式でつくられた館には、ミャオ族の伝統文化を紹介する展示室、多目的な学習室、レストランなどが備えられており、ミャオ族の伝統を紹介し、継承するための取り組みがなされている。注目すべきは、この館が個人で経営されている点である。あるミャオ族男性が、失われつつあるミャオ族文化を守っていききたいという思いを抱き、私財を投じて館を建設したのである。

国家行政が地域社会の隅々にまで浸透している中国において、このような動きは、従来のトップダウンによる国家政策とは異なる、民間からのボトムアップの動態ととらえることができよう。それでは、このような民間の施設はいかに経営されているのだろうか。

本稿では、この館を、地元のミャオ族によってミャオ族文化を伝える目的で設立されたという意味で、自民族表象の場としてとらえる。そして、その設立の経緯や活動内容を追いながら、何が館の経営を可能にしているのかを考察する。それは2000年代以降、中国において加熱する博物館のリニューアルや、無形文化遺産登録などの動きが、ローカルな地あるいは少数民族の文化表象にいかなる影響を与えているのかを明らかにすることにもつながる。

2. 自文化を表象すること、その経営

世界各地で、人類学・民族学博物館が脱植民地主義化、脱中心化を図り始めている。その背景には、これまで没交渉であった展示をする側とされる側が接触可能となり、両者間に存在するローカル／グローバル、周辺／中央、マイノリティ／マジョリティといった権力構造が問われ始めていることが指摘される。このような動きの契機となったのは、1993年の「世界の先住民の国際年」に際してオーストラリアでまとめられた、博物館と先住民族のあいだの関係についてのガイドライン「かつての所蔵品と新たな義務—アボリジナルおよびトレス諸島諸民族とオーストラリアの博物館の関係についての指針」だとされる(吉田 2013: 191)。このガイドラインはオーストラリアのみならず北米や、広く世界の博物館にも影響を与えている。

この動きのなかで現れ始めているのが、トライブ博物館やローカル博物館などと呼ばれる、これまで展示される側だった人々による自民族・自文化の表象、展示活動の場の創設である。例えば北米では、ポトラッチの回復や宝器の返還などを求める動きに伴い、その受け皿としてのトライブ博物館が設立されている(クリフォード 2002)。オーストラリアでは、アボリジニの絵画がアートとして国際的な評価を受ける過程で、アボリジニのローカル博物館が建設されている(Kubota 2007)。ザンビアでも、1990年代以降、民族単位で、それぞれの民族の文化の展示を目的とした博物館が競い合って建設されている(吉田 2013: 203)。このような動きは、従来の大きな博物館の価値観や評価軸によって、文化の伝統性や真正性が探究、表象されてきたのに対する意義申し立てでもある。

世界規模で展開される自文化・自民族の継承と表象の装置としての博物館建設の動きは、これまでの一方的な権力の装置であった主流の博物館のあり方を揺り動かすものとなる。そして、今後ますます双方向・多方向の接触と創造の場、フォーラムとしての性格を帯びることが期待される(吉田 2013: 206)。このような視点に立てば、本稿が事例として取り上げる「ミャオ族文化伝承保護館」も、自民族の展示、表象といった点からトライブ博物館の性格を備える施設としてとらえることができよう。

しかし、これらトライブ博物館の動きに着目する研究は、往々にしてその文化や民族がいかにかに表象されているのか、また主流な博物館との関わりや齟齬などを論点としている。それは、クリフォードが挙げるトライブ博物館による4つの問題設定からも示される。その問題設定の一つ目は、対抗的なスタンスや排除されてきた経験、植民地的過去、現代の闘争を展示に反映する点、二つ目は芸術／文化の区別を問題としない点、三つ目は大文字の歴史が、コミュニティやローカルな歴史によって批判さえる点、四つ目には必ずしも遺産化を望んでいない点である(クリフォード 2002: 146)。

だが、クリフォードの想定するトライブ博物館は、宗主国と植民地の関係性を前提としており、それ以外の関係性にあるトライブ博物館がいかにかに存在しているのかについては、さらなる考察の余地があろう。本稿では、「ミャオ族文化伝承保護館」を事例として取り上げることで、宗主国と植民地、大文字の歴史とローカルな歴史といった牢固たる二項対立的概念とは異なる位相におけるトライブ博物館の在り方を提示することを試みる。

同時に、トライブ博物館に関する議論は、表象の問題に焦点を当てるがゆえに、それらがいかにかに経営されているのかという点を看過する傾向にあることも指摘できる。ミュージアム・マネジメントは、主に博物館学において論じられるが、そこでは、制度や法によって博物館とみなされる施設を対象とする前提があるため、トライブ博物館のような取り組みが議論の俎上にあがることはないのである(cf. 日本ミュージアム・マネジメント学会事典編集委員会(編) 2015)。

しかしながら、国家行政が地域社会の隅々にまで浸透している中国において、民間の施設がいかにかに設立され運営されているのかを明らかにすることは、従来のトップダウンによる国家政策に基づく中国社会の理解ではなく、1980年代以降の改革開放政策やグローバル化にともなっていかにボトムアップの形で社会が構築されているのかへの理解を促すことに繋がる。同時に、1980年代以降、観光開発や文化遺産化の動向のなかで再評価されてきた少数民族の文化が、トライブ博物館で紹介されることを通じて、自文化表象としていかにかに展開、表象されているのかも明らかにすることができる。

1949年に中華人民共和国が成立して以降、中国において博物館事業は、文化部文物局の管轄となった。1957年には全国に、建国時の3倍である72の博物館施設ができた。その後、文化大革命での混乱を経て、1980年代から国家文物局によって改めて博物館事業が開かれていく(呂 2004: 6-7)。現在は、国家級、省・市級、それ以下の小規模なもの、つまり国立・公立の博物館がおよそ700以上あるとされる(呂 2004: 7)。また、一部国立・公立とも重なるが、企業が運営する企業博物館もある(晨 2003)。

一方で、「民間博物館」や「私人博物館」と称される施設も存在する。1990年代ごろから設立されはじめ、正確な統計はないものの、2000年代初期には全国に300以上存在するとされる(李 2005: 1)。そこには民間企業、個人企業、株式制、政府の助成を受けての民間運営、家庭内収蔵館といった経営体制がみられる(李 2005: 5)。このような「私人博物館」に対しては、国家による管理法が敷かれておらず、各地域の状況に合わせて個別に管理条例が制定されているのみである(李 2005: 6)。

このような中国における「私人博物館」研究においては、人員や管理能力の欠如、運営資金の不安定さ、コレクションの質や数の問題、法や制度遵守に関する問題などが指摘されるばかりで(李 2005: 20-24)、その実態に迫ることが難しい。

そこで本稿では、トライブ博物館に相当する個人経営の施設を、経営の観点から考察する。具体的には、中国雲南省文山にある「ミャオ族文化伝承保護館」での取り組みを事例とし、そこでの自民族表象と館の経営がどのような関係であるのかを明らかにする。

3. ミャオ族／モンとフィールドの概要

本稿で事例として取り上げるのは、中国雲南省文山チワン族ミャオ族自治州(以下、文山州と表記)に居住するモン(*Hmong*)と自称する人々である。モンは、中国においてはミャオ族の一部の自称集団である。

中国における55の少数民族のひとつに数えられるミャオ族は、貴州省から雲南省、湖南省、四川省、広西チワン族自治区の山地に広く居住しており、地域によって言語、生業、習慣などが少しずつ異なる。大きく分けて、湖南省西部から貴州省東部に居住するコー・ションと自称する人々、貴州省全体に分布するムーと自称する人々、そして貴州省西部から雲南省、四川省にかけて広く居住する蒙の三集団あるとされる。本稿が対象とするモンは、ミャオ族の自称集団のうちもっとも人口が多く、居住範囲も広い。

またモンは、国境を跨いで居住しているという特徴を持つ。かつて中国からベトナム、ラオス、タイの山地に移動し、それぞれの国においても山地民や少数民族としてとらえられている。また、ベトナム戦争が終結した1970年代後半以降、ラオスから、アメリカやオーストラリア、フランス等の国にも難民として移住している。モンは、中国においてはミャオ族として認識される一方で、国境を跨いで世界各地に散住している人々でもある。文山州は、中国外のモンにとって精神的な故地であるとみなされており、ここを訪れる中国外のモンも多く、国境を越えたネットワークも形成されている。

文山州に居住するモンは人口約42万人で、漢族約140万人、チワン族の約100万人に次ぐ人口である。彼らはもともと焼畑農業を営み、清代に貴州省から南下してきたとされる。標高の高い山地に居住するため、往々にして水源に恵まれず、乾燥地でも育つトウモロコシ

を主食としている。文山州はベトナムと国境を接する中国の辺境地域でもある。

筆者は、2007年から文山州において調査研究をおこなってきた。本稿における記述は、このような継続的な調査の一部に位置づけられるが、事例として取り上げる「ミャオ族文化伝承保護館」における調査は、2017年9月4日、2018年3月5日、8月16～18日におこなったものである。

なお本稿では、「ミャオ族」と「モン」の両方の表記を使用するが、文脈によって意味を使い分ける。中国国家において規定された少数民族という意味で使用するときには「ミャオ族」を、文山州から東南アジア、欧米各国に居住する人々を指す場合には「モン」を使用する。

4. 館の設立までの過程

まずは本稿が事例として取り上げる「ミャオ族文化伝承保護館」がどのように設立されたのかをみていきたい。

館を設立したのは、モン男性のH氏である。彼は1960年に文山州麻栗坡県の農村に生まれた。4人兄弟の末っ子で、父を早くに亡くしている。そのため「衣食住にも事欠くような生活だった」と言う。文山州委党校を卒業後、20歳から故郷の農村で小学校教師をしていた。1983年に、2歳年下の女性と結婚し、子供が2人いる。

20年くらい前から、国家による援助によって生活水準が緩和するにしたがい、失われつつあるミャオ族文化を残そうという思いが出てきたという。H氏は、その思いを次のように語る。

ミャオ族は中国少数民族のなかでも最も長い歴史を持つ民族であると同時に、苦難を乗り越えてきた民族でもある。自分の故郷はとても貧しいところだった。食べるものもなかったし、山の上だったので小道があるだけの交通も不便なところだった。国家の助けによって、いまはセメントの道路もできた。でも、発展とともに多くのものが失われていっている現実もある。それらを残して次の世代に伝えていきたい。

そこで、教師業の傍ら、村々を回り、伝統的な慣習や知識を学び、生活用具などを収集し始めた。時に、収集したくてもお金が足りずに諦めたこともあったという。また、交通手段がなく、徒歩で村々を訪れたりするなど、苦労も絶えなかった。当時の給料はほぼすべてこれらの収集活動につき込んだと言う。しかし、伝統を残し、次の世代に伝えるのが自分の使命なのだと考えてきた。

教師を退職し、息子が働いている砚山県に来たときにX村のことを知り、館を作るのに良い場所だと思ったとのことである。X村は、445戸、約2000人の人口を有する蒙の村である。もともと周辺にあった5つの村の住民たちが、2006年ごろに政策によって移住させられできた新しい村である。そのためX村は、村の中心に直線の道が走り、その左右に家屋が配された整備された景観となっている。文山県と砚山県を結ぶ幹線道路沿いに位置し、文山空港（2006年開港）からも2～3kmの交通便利な場所にある。旧正月の時期に開催される文山州のモンにとって最大の祭りである「花山節」の会場となる村でもあり、その時

期には多くのモンが集まる。X村は、比較的新しい村であり、交通の便がよく、祭りの開催場所として多くの人に認知されているのである。H氏は、妻をともない麻栗坡県の故郷からX村に移住をし、2014年5月から館の建設を始め、2015年に開館させた。

2015年12月19日に執り行われた開幕式の様子は、地元のマスコミによって紹介されている。それによると開幕式には、地元の共産党委員書記や県人民会議の副主任、文山州のミャオ族協議会会長などが招待され、祝辞を述べたとのことである(硯山苗協)。また若者が蘆笙舞を披露するなど、盛大な開幕式がおこなわれた。

館を設立させた自負を、H氏は次のように語る。

このような場所を作るのが私の夢だった。文化を保護して次の世代に伝えていくのだ。古いものはもうないからね。このようなことをしようと思ったら心意気と、お金のどちらも必要だよ。心意気はあってもお金がなければできないし、お金があっても心意気がない人には成し遂げられないでしょう。

5. 館の活動内容と来訪者

それでは、H氏の長年の夢を叶えた館ではどのような活動をおこなっているのだろうか。それは主に展示、文化教育、レストランに分けられる。



写真1 館の概観

館は四合院の建築様式で建てられており、そこに平屋の展示室が配されている(写真1)¹。館の入口には部分には、モンの儀礼に欠かせない楽器である太鼓と蘆笙、そして伝統衣装を着たマネキン²体が置かれている。そして、漢語とモン語で「这里是向远古文明的隧道，这里是寻根问祖的重要殿堂」、「*Ntawm No Yog Txoj kab Tang Hmoob Keeb Hmoob Kum, Ntawn No Yog Txoj Kev tang Hmoob Txuj Hmoob Ci*」と書かれたパネルが掲げられている(写真2)²。翻訳す

¹ 入口から一番奥に位置する建物の2、3階がH氏ら家族の住居である。

² もともと無文字であったミャオ族およびモンの、新たに作られた文字にはいくつか種類がある。文山州から東南アジア、欧米各国に居住するモンが使用しているモン文字は主に、2000年以降に雲南省紅河州河口県橋頭郷の音を標準として作られた文字と、1953年にラオスにおいてアメリカ人言語学者と2人のモン男性によって作られた文字の2種類がある。ここでは便宜的に前者を「中国モン文字」、後者を「ラオスモン文字」と呼ぶ。H氏が館でのキャプション標記に採用しているのは、「ラオスモン文字」である。その理由をH氏は、「国外からのモンが読めるように」と説明する。展示表象の問題については、別稿で論じたい。



写真2 漢語とモン語が併記された入口の
パネル

ると、「ここは古代文明（モンの歴史）³へと向かうトンネルである、ここは祖先のルーツを探するための重要な殿堂である」という意味であり、H氏は「この館は文明へのトンネル。ここを通ったら遠く昔の歴史が分かり、祖先、家を探し当てることができるのだ」と解説する。H氏は館の導入部分にこのようなパネルを掲げることで、「古代文明（モンの歴史）」や「祖先のルーツ」といった民族の歴史を想起させるような仕組みを作っているのである。

展示室は「生産生活用具展示室」、「紡織文化展示室」、「古籍祭祀文化展示室」、「原始居住体験室」の4セクションに分かれている。「生産生活用具展示室」には、木製や竹製の台所用品が、「紡織文化展示室」には織機や藍染め、ろうけつ染めに使用する染織用品などが、「古籍祭祀文化展示室」には、正月の遊びであるコマや羽子板、太鼓や蘆笙の楽器、儀礼や占いに使用する用具、婚礼の道具などが展示されている。また服飾のコーナーには、女性用衣装がサブ・グループごとに展示されている。「原始居住体験室」は、かまどのある台所、若夫婦の寝室と老夫婦の寝室が再現されているジオラマ展示になっている。

展示物は、ほとんどが30～40年前のもので、現在では農村でもみることができないものばかりである。H氏が20年かけて収集、保管してきたものである。特に衣装は、経年劣化したり、着用者が死亡した際にはすべて燃やしたりするため、古いものは残っていないことが多い。そのため姉妹、祖母の祖母やその姉妹などの協力を得ながら、苦勞して収集したものだと言う。

ここでH氏らが重視しているのが、彼らが「伝統的」だと考えるものを展示することであることを指摘しておきたい。例えば衣装は、現在でもモン女性にとって、それを特定の場面で着用することが重要な意味を持つが、一方でデザインや素材、製作技法が大きく変化している（宮脇 2017）。しかしH氏らにとって、このような「時代の流行のモン衣装」は、館で展示するものとしては相応しくないものだと考えられているのである。ここでは、徹底して「民族の歴史」あるいは「過去」へこだわっていることが特徴として明らかになる。

次に紹介する活動が、文化教育である。館にはステージが設置された多目的室があり、そこでモン文化にまつわる教室を開催している。内容は、モン語、クロス・ステッチ（刺繍）、蘆笙、歌やダンス、マナーなどである。

教室は、地元政府からの補助金を得て開講する。そのため、開講は不定期である。講師には、他からミャオ族の専門家や学者などを呼ぶ。日程は、5～6日のコースから10日ほどの

³ 「文明」に相当するモン語はない。モン語では「*Hmoob Keeb Hmoob Kum*」、すなわち「モンの歴史」と表記されることを、漢語では「文明」と意識している、とH氏は説明する。

ものもあり、参加者にはその間、宿泊、食事を無料で提供する。H氏によると、参加者には、モン文字、歌、マナーなどの知識を必要とする中年層や若者が多く、老世代はあまりいないという。

H氏が特に強調するのが、マナーの習得である。H氏はマナー習得の重要性について、次のように語る。

農村の人は客のもてなし方を知らない。しかしマナーは習得できるものである。例えば客が来たときに、どうやってお茶を淹れるか、食事をするか、握手をするかなどを身につければ、先進的な民族、つまり優秀な民族になることができる。そうすれば経済的にも豊かになり、貧困から脱却できるのだ。またそのためには、民族の歴史と伝統を知ることが大切なのだ。

マナーを身に着けること、そのために歴史や伝統を理解すること、そうすれば貧困から脱出し、素晴らしい民族になること。これらはH氏にとって、非常に密接な相互関係にあると捉えられていることをここで確認しておきたい。

もうひとつ、館の活動としてはレストランを併設していることが挙げられる。レストランとはいうものの、専任の料理人などはおらず、H氏とその妻が調理をおこなう。団体客や文化教育の受講者への食事提供が主である。

以上みてきたように、館は多様な活動を展開しているが、注目すべきは、館の活動は基本的に無料で提供されているということ、そしてH氏個人によって経営されていることである。

館には原則、H氏とその妻しかいないため、訪問する際には事前予約をすることが求められる⁴。開館してから3年で約3万人の来訪があったとのことだが、そのほとんどは事前に連絡があった団体客である。例えば貴州省のミャオ族が団体で来ることも多いし、北京服装学院の民族服飾博物館の研究者の訪問を受けたこともあるという。ラオスやベトナム、タイからもモンが訪れることもあるし、アメリカに居住する蒙の学生が数十人や、モン文化を研究するアメリカ人の訪問もあったという。また、中央電視台や雲南電視台、文山電視台といったテレビ局関係者の訪問もある。

館を訪問するのは、国内外のモン、モン文化や少数民族文化に興味のある者、メディア関係者が多い。彼らは州政府に紹介されたり、あるいはインターネットやラジオ、SNSで存在を知って来るという。

H氏に、どのような人に来てもらったら一番嬉しいか?と尋ねると、少し考えて、「国籍や民族に関係なく、誰にでも来てほしい」との返答であった⁵。そのために、館では幅広い活動を提供しているのである。そして、「文化を広めるためにおこなっている活動なのだからお金は徴収しない」と語る。

⁴ 筆者はインターネットの記事でこの館の存在を知り、2017年3月に事前連絡をせずに訪れてみたが、H氏らの不在により見学がかなわなかった。その後偶然、知り合いがH氏と親戚であることを知り、その知り合いを通じて連絡を取ることが可能となった。

⁵ H氏は、筆者に対しても、「日本の友人にも館のことを紹介してほしい。多くの日本人にここに来てほしい」と期待を寄せる。

6. 運営の理念と経営の実情

これまでみてきたように、H氏は、館の多様な活動は決して個人的な金儲けのためにやっているのではないと語る。しかしながら、営利目的ではない個人経営の施設は、実際どのように経営されているのだろうか。ここでは、H氏の語りから、運営の理念と経営の実情について述べていきたい。

H氏が筆者との会話において強調するのが、失われつつある伝統を保護、継承すること、そしてミャオ族が自身の文化や歴史を学ぶこと、さらにそれを他の民族や次世代へと広めることへの強い思いと責任感である。

H氏は、次のように語る。

館にあるものは他の場所ではもうすでに見つけられないものばかりでしょう。これらの展示は、人々に我々ミャオ族の歴史、文化を理解してもらうためにやっている。

過去の歴史を知ることで、何をミャオ族というのかを理解することができる。これまで多くの人が参観に来た。彼らも以前は自分たちの歴史や文化を知らなかったし、理解もしていなかった。なぜなら我々の歴史も文化も失われつつあり、みなミャオ族が何なのかを知ることもできなかったからだ。でも今、我々のところに来れば、ミャオ族とはどのようなものなのか、文化とはどのようなものなのかを知ることができるだろう。世界に自分がミャオ族なのだということを知らしめることが可能になるのだ。

H氏のこのような語りからは、古いものを契機として歴史を感じることで、ミャオ族にとってはミャオ族の自覚を、それ以外の人々にとってはミャオ族について理解してもらうことが可能になるのだという考えが読み取れる。失われつつあるものによって、民族の過去や歴史が想起され、民族としてのアイデンティティも強化されるというのである。

しかしながらH氏に、館を運営していくうえで大変なことは何かと尋ねると、「ビジネスではないので、お金がないことだ」と答える。H氏は、経営が決して楽ではないことも吐露するのである。それでは館の経営状態はどのようなになっているのだろうか。

館はH氏が私財を投じて設立したものである。H氏の教師時代の給与は2000元弱（約35000円）だったといい、それは平均的な額だったと思われる。一方でH氏の妻は、結婚後に、米やトウモロコシ栽培の農作業をおこなう傍ら、さまざまな商売をして農村の貧しい生活を乗り切ってきたのだと語る。最初の商売は故郷に食堂を開いたことだった。食堂を半年ほどした後は、4年間ダンスホールを経営した。その当時、何の商売をおこなうのが一番いいのかを考えた結果がダンスホールだったとのことである。その後の4年ほどは、ミャオ族の伝統衣装を作って、定期市で販売することをしてきた。しかし目を悪くして、服作りが困難になったため、伝統衣装販売はやめたが、当時の稼ぎはとても良かったのだという。その後は、エメラルド採掘⁶に携わり、とても儲かったのだという。その後は車を購入し、

⁶ H氏らの故郷である麻栗坡県では1980年代にエメラルドが発見された。1996年には「中

3年ほど運転業をしていた。その後、X村に来たが、その際には故郷の土地などをすべて売ってきたのだという。H氏には現在、年金⁷と、後述する無形文化遺産传承人の補助金として月数千元の収入がある。



写真3 建設中の新しい建物 (2018年8月16日撮影)

館の設立当初の建築資金は約400万元(約6600万円)であったという。そのうち州・県文化産業助成金から65万元の補助を受け、残りの約340万元は自己負担である。補助金があったのは開館当初のみで、あとは自分でまかなうしかないのだという。

現在、館ではダンス等のパフォーマンスや、文化教育の受講者が宿泊するための新たな施設を、2018年春から建築し始めた(写真3)。その予算

は500万元とのことで、寄付金を募ったりと資金繰りに奮闘している。それでは館ではどのように資金を集めているのだろうか。そこには、文化の保護と伝承という表向きの活動以外に、営利目的ともとれる補足的な活動をいくつかおこなっていることが確認できる。

その象徴が、館の入口に設置されている、「主营：苗薬膳鶏、苗家特色菜、苗薬、民族楽器、民族伝統服飾」と書かれた看板であろう(写真4)。これはすなわち、「ミャオ族漢方の薬膳鶏、ミャオ族の家庭料理、ミャオ族の漢方薬、民族楽器、民族の伝統衣装」によるビジネスをおこなっているのだということを意味する。

レストランでの食事は、事前予約をして訪問した団体客や、文化教育の受講生には無料で提供されるが、その他の客からは利益を得ることもある。例えば、2018年8月17日の昼に、突然4人の客がやってきた。彼らは浙江省から別の用事でここに来たといい、たまたま看板を見て食事を取りに寄ったのだと説明した。急遽、H氏の妻が展示場を案内し、そのあいだにH氏と、ちょうど家にいた長男の嫁が食事の準備にとりかかった。H氏は鶏を絞めて、「苗薬膳鶏」すなわち鶏と三七ニンジン⁸の鍋を作り、提供した。彼らからは食事代を

国エメラルド」とのブランド名が付けられ、中国唯一のエメラルド原産地として麻栗坡県が注目された(中共文山州委宣传部等(編)2014:99)。

⁷ 中国における公的年金制度は、都市民と農民の違い、さらに企業就労者や公務員、農業従事者の違いによって異なる。本調査においては、H氏の年金がどのような種類のものなのか詳しく聞き取りをおこなうことができなかつたため、大まかな意味で「年金」と表記する。

⁸ 学名 *Panax notoginseng* Berk.。ウコギ科の薬用植物。雲南省や広西チワン族自治区の海拔1200~1800mの地域で栽培される。止血作用や活血(血液循環の改善)作用がある。別名「田七」、「金不换(金に替えられないほど価値が高い)」。ミャオ族の多くも1980年代から三七ニンジンの栽培に携わっている。



写真4 サイド・ビジネスを示す看板

徴収した。またその翌日の昼には、X村で土木作業に携わっている男性2人が食事を取りに訪れ、炒飯が提供された。

館のレストランは本来、飛び込み客を想定していなかったと思われる。また常時、客を迎える体制を整えているわけでもない。そのため、突然の客があると、H氏らはその時にある食材で、急ぎ食事の準備をすることになる。客は待たされることになるが、X村には、麺などの軽食を出す食堂が他に2,3軒あるだけなので、あまり競合しないのだろう。H氏は、「友人からはお金は取らないけど、少ない稼ぎを補うために、知らない人からは食事代を取る」のだと説明する。

またH氏には、漢方薬師（薬草医）としての活動もおこなっている。H氏は教師の傍ら、父や祖父から学んだという知識を生かし、漢方薬師としても活躍していた。そのためH氏

は、2007年に、漢方薬師として無形文化遺産传承人（後述）になっている。漢方薬師として依頼があれば応じるが、しかし漢方薬に対しては「騙しているのではないか」と疑う人もおり、あまりうまくいかないとも語る。

その他、H氏の妻が製作したミャオ族の伝統衣装などの販売もおこなっているが、大きな利益を生むような商売ではないようである。

それ以外に、館の設立計画を始めたのと同時期である2014年6月に、H氏の妻が代表となっている有限会社を設立している。親族10名ほどで経営している会社で、「花山節」の際の舞台設営をおこなったり、電光掲示板などの装置を製作したり、その他、伝統衣装や銀細工、楽器の販売などをおこなっているという。妻は「新しい施設はお金がなくてまだできていないでしょう。お金になることは何でもするわよ」と語る。

以上のように、館はミャオ族文化の保護と伝承を謳い、さまざまな活動を無料で提供しながらも、実際には補足的な営利活動を展開しているのである。

H氏は、館の理念として次のように語る。

館はお金儲けのためにやっているのではない。文化の価値は高いからね。

次の世代が我々の歴史を学んで理解したら、我々の民族、我々の国家を愛するようになるだろう。人々に我々の歴史、文化を理解してもらうためにやっている。館の目的は、学び、交流し、コミュニケーションをとり、調和、進歩、発展すること。ただ一番大事なのは、楽しく過ごすことだ。

ここでも、歴史や文化を知ることの重要性が語られるが、それは決してお金儲けではない

のだということも強調される。

しかし一方で、「生活費を少し稼ぐために、商売としてレストラン経営や漢方薬師としての活動をおこなっている。でも客は多くないので、儲けはあまりない」とも語るのである。

文化事業はビジネスではないという、いわば非営利の理念を掲げつつも、資金不足のため、新たな施設の建設が思い通りに進まないのが、H氏らの目下の大きな悩みなのである。

7. 現代中国における「民族文化」解釈と「歴史」の重要性

それではなぜH氏が、時に苦しみなながらも、自らを非営利と営利のはざまに位置づけているのかについて、若干の考察を試みたい。着目したいのは、「民族の歴史（過去）」を学ぶこと、理解することの重要性をH氏がどのように位置づけ、解釈しているのかという点である。

7-1. 現代中国における「民族文化」解釈

中国では、1976年に文化大革命が終結した後の1980年代以降、政府主導で経済の再開がおこなわれ、文化に対する自信の回復も図られた。文化が革命の対象から保護の対象になった時代である（櫻井ほか 2011:6）。その後、この30年で4億弱の国民が農民から市民へとなり、都市化、都市型生活様式をおこなう者が増加した。その結果、伝統的なものが否定され、農村でも消滅の危機にさらされるようになった。そのため、伝統文化や農村に対する再評価の動きがあらわれるようになった（櫻井ほか 2011:7）。同時に1980年代以降、少数民族の文化を観光の対象とした民族観光や、文化観光開発が盛んにおこなわれるようになり、「文化資源」や「エスニックシンボル」が次々と発掘され、その重要性が問われるようになってきた。現在の無形文化遺産保護運動は、中国国民の社会生活や文化生活の民主化への一環として位置づけられる（櫻井ほか 2011:6）。

ここでミャオ族に焦点を当てて、民族表象の展開をみていきたい。1984年に民族区域自治法が施行され、少数民族の言語や文化が尊重されるようになった。1986年が、中国の民族観光元年とされる（曾 2001:87）。貴州省のミャオ族居住地域では、少数民族が実際に生活する村や祭りをする場所が観光スポットとして開発された（曾 2001:90）。観光村に到着すると、観光客は民族衣装を着用した村人に出迎えられるといったようなパフォーマンスがおこなわれた。とりわけ、ミャオ族の居住村である貴州省六枝特区梭戛が中国初の生態博物館として開発されたことは、民族文化の展示、表象の議論において興味深い（尹・顔 2018）。

一方で、雲南省におけるミャオ族は、観光開発の資源や博物館展示の対象、つまり表象の対象にはあまりされてこなかった⁹。特に文山州は、11の民族が居住しているが、際立った観光開発はおこなわれてきていない。これはつまり、文山州に住むモンにとって、自民族の文化を客観的にとらえたり、自ら評価したりするような機会が多くなかったことを示す。

それは彼らの置かれていた社会的なポジションからもうかがい知ることができる。筆者はこれまで、文山州のモンが、漢族から「見下された」経験の語りを聞くことがあった。例

⁹ 雲南省においては1990年代以降、石林のサニ（イ族）、大理のペー族、麗江のナシ族、西双版纳のタイ族が代表的な民族観光資源として開発された。

例えば、2007年に筆者が文山州のあるモンの村を訪れたときのことである。とある家に案内され、勧められるまま腰掛けに座ったとき、「以前、町から漢族が来たことがあるけど、彼らは『汚い』と言って絶対に座ろうとしなかった。だけどあなたは違うね」と喜ばれたことがある。また、1939年生まれのもん女性からは、かつてモンは漢族から差別的に扱われており、公衆の面前で、モンの特徴的な衣装であるスカートをはぎ取られた女性がいたとの話を聞いたこともある。マジョリティである漢族から、さまざまな点で否定されてきた経験を持つ人々が、いかに自文化に誇りを持つことができるというのだろうか。

しかし2000年代にはいり、中国全土で無形文化遺産登録への熱が帯びると、状況が変わってくる。ユネスコ総会は、2003年に「無形文化遺産の保護に関する条約」を採択した。それは、(a)口承による伝統および表現、(b)芸能、(c)社会的慣習、儀式および祭祀行事、(d)自然および万物に関する知識および慣習、(e)伝統工芸技術を対象にしたものである。中国は世界でもいち早く2004年に、ユネスコの無形文化遺産事業に加盟した。2011年6月1日に、「中華人民共和国非物質文化遺産法」が施行され、2013年には、「雲南省非物質文化遺産保護条例」が施行された¹⁰。

中国における遺産登録の手順の特徴として、行政による縦割りの単位、つまり地域主義に基づいて登録を目指すことが挙げられる（兼重 2016: 24-25）。そのため、まず県級、そして州級、省級、国家級と段階を経て申請していかなければならない。また、無形文化遺産では、そのモノだけでなく、それを製作、保存、継承していく知識や技術を持った人、つまり担い手が重要となる。そのため中国では2007年から無形文化遺産伝承人の登録が進んでいる。伝承人とは、伝承する無形文化遺産を徹底的に把握し、特定の専門分野では代表性を持ち、かつ、ある地域内において、一定の影響力を持たねばならない人、とされる（「無形文化遺産法第二十九条第二項」中国非物質文化遺産網）。

2015年の時点で、文山州には、国家級無形文化遺産が5項目、伝承人が5人、省級が30項目、伝承人が75人、州級が85項目、伝承人が165人、県級が400項目以上あるとされる（文山新聞網）。H氏もこの省級伝承人の1人なのである。

このような動きに伴い、一般の人々にも文化資源の重要性が認識されるようになり、また自民族、自文化を客観的にまなぐ機会が増えるようにもなったといえる。その契機のもう一翼を担うのが、博物館であろう。

文山州文山県では、4年の建設期間を経て、文山州博物館が2014年12月28日に開館し、12月31日より一般公開された。ちょうど「ミャオ族文化伝承保護館」が開館する1年前のことである。町の郊外の新しく整備された場所に位置し、州政府や広々とした公園に隣接し、人々の憩いの場となっている。また入館は無料である。常設展の一部である「多姿民族」では文山州に居住する11の少数民族が、民族ごとに紹介されている。

この文山州博物館の前身は、文化局の建物に併設されていた展示室であった。筆者は2004年10月に訪れたことがあるが、そこは常時開館しているわけではなく、知り合いを通じて開けてもらわなければならない場所であった。そのため一般の人にとっては、参観する機会などほぼない施設であった。それと比べると新しい博物館は、多くの地元民にとって身近に楽しむことができる施設となっている。経済状況の進展により、かつてレジャーとは無縁だ

¹⁰ 無形文化遺産は中国語で「非物質文化遺産」と表記される。

った農村の人々が訪れることが可能になったことは、これまで身の回りに当たり前にあるモノが、価値あるものとして展示されているという新鮮さを、彼らにもたらず。

無形文化遺産に関する動向は、行政単位による縦割り政策によって、文山州の県レベルにまで浸透した。民族文化伝承人の登録や、博物館展示を通じて、広く一般の人々にも、自文化を振り返り、「古い」ものに内在する伝統性や価値を見直す可能性が開かれるようになったのである。とくに少数民族にとっては、伝統文化の掘り起こしと再解釈をおこない、文化資源として活用することが、民族の社会的地位の向上や生活水準の上昇につながると認識されている (cf. 武内・塚田(編) 2014; 塚田(編) 2016)。

7-2. 「民族の歴史」の重要性

ここでH氏の「民族の歴史」への理解についての語りをもう一度確認したい。

H氏はまず、「過去の歴史を知ることで、ミャオ族としてのアイデンティティを確認できる」と考えている。そして「歴史を知れば、民族と文化について理解することができる」とする。そしてそれを「他の人々にも知らしめること」が大事だと考えている。また、民族の歴史と文化を知ることで、(漢族とも対等に渡り合える) マナーを身に着ける必要性も理解できるようになり、マナーを身につければ「先進的な民族、優秀な民族になる」ことができ、そうすれば「経済的にも豊になれる」と考えているのである。つまりH氏にとって、民族の歴史を正しく理解することは、ミャオ族の独自性や正当性を主張できることに繋がり、さらには貧困を脱し、経済的にも豊かになれる保証にも繋がることなのである。

また館の展示品が、「他の場所ではもうすでに見つけられないばかり」という、いわゆる「伝統的」なものである点にも注意したい。H氏に展示の方法や技術はどこで学んだのかと尋ねたところ、「誰に教えてもらったわけでもなく、自分で考えたのだ」との答えであった。そして先述した文山州博物館とは関わりがないとも語る。

この姿勢は、文山州博物館の側も同様である。筆者は2018年8月13日に、文山州博物館の館長へインタビューをおこなう機会を得て、館のことを尋ねてみたが、「館のことは知らない」との回答であった。実際に、博物館事業が文化局の管轄であるのに対し、H氏が無形文化遺産の伝承人であることによる無形文化遺産事業とは、管轄部門が異なるため、相互的な交流がないのだという。

しかし、文山州博物館の展示も、いわゆる「伝統的」なものを求めることは否めない。先述したように文山州では、1990年代以降、モンの伝統衣装が既製服として市場で販売されるようになり、デザインや色が大きく変化している状況がある(宮脇 2017)。つまり、自然素材を利用し、染織や刺繍をほどこした手仕事による衣装はもはやほとんど見られないのである。しかし、文山州博物館に展示されているのは、1990年代以前の、手仕事による衣装なのである。それに対し、博物館館長は次のように語ってくれた。「なぜ現代的な流行の衣装は収集しないのかって?それは、変化がとても速いからだ。また市場化したからだともいえる。特にモンの衣装は、マーケットの動向によって、デザインや色の変化がとても速い。そのような流行の時間が短く、また流行する範囲が狭いものには、(民族の)「代表性」がないからね」。

H氏は自らの展示活動を、国家の博物館事業とは関係がないとするが、意図せずともこのような展示の作法の影響を受け、それを内面化させている可能性は指摘できよう。新しい

ものより失われつつあるものに価値を見出し、それらが歴史や文化を知るためには重要なのだという見解である。

このような古いものから感じられる歴史、民族アイデンティティの強化、民族の地位向上や貧困脱出が相互関係にあるという見解を理解するために、示唆を与えてくれるのが長谷の論考である。雲南省徳宏州のタイ族の歴史意識とその資源化のプロセスについて考察をおこなった長谷は、少数民族にとって、過去の繁栄と未来の繁栄が比例関係にあると想定されることを指摘する（長谷 2016: 478）。つまり、過去にきちんとした歴史を持つ民族は、今は遅れていても、未来に向かって近代化を遂げることができるのである。民族の未来を輝かしいものにするためには、輝かしい歴史を持つ必要があると、民族文化の資源化に携わる人々が考えているのだ、という（長谷 2016: 478）。

この視点の基づくと、H氏が「民族の歴史」を重視することも理解できよう。H氏は、「民族の歴史」を輝かしいものにし、それを正しく理解することが、民族全体の社会的地位、経済状況を上昇させると信じているのである。H氏は幼いころ、山深い農村部で衣食住にも欠く生活を送っていた経験を持ち、ミャオ族が「貧しく、遅れている」民族だと肌で感じていた。しかし漢方薬師としての知識が無形文化遺産伝承人への認定に繋がった経験などから、現代中国における「民族文化」解釈の理念に忠実であることが、民族としての成功につながると考えているのではないだろうか。そして、それをとてもまじめに内在化させて、館の運営をおこなっているのである。

H氏の語りは、日本人という「他者」であり、かつ研究者というある種の「権威」を持つ筆者に対して発せられるとき、より模範的であろうとする意識が多分に働くことは予想できる。しかしそれを差し引いてもH氏は、民族の社会的地位向上や経済状況の上昇、あるいは自らの名声獲得といった現実的な目論見を、「民族の輝かしい歴史と輝かしい未来」の関係性へと置き換えるためには、金儲けを館経営のビジョンとすべきではないと固く信じているのだと言えよう。そのため館は、実際には経営難にあり、細々としたサイド・ビジネスを展開しながらも、非営利の体を取っているのである。

8. おわりに

本稿では、中国雲南省文山州に2015年に設立された「ミャオ族文化伝承保護館」を事例に、自民族表象の場が、非営利な施設として、いかに経営されているのかについて論じてきた。

ここで最初に提示した、国家行政がトップダウンによって地域社会の隅々にまでいきわたっている現代中国において、民間の施設はいかに経営されているのかという問いに戻りたい。本稿では、「ミャオ族文化伝承保護館」を、自民族表象の場としてとらえることでこれを考察した。

20年来の夢を実現させたH氏の活動の過程は、中国が民族文化を再評価し、資源として利用可能であるとみなし始めたプロセスと合致する。この歩みにともない、H氏は、民族の社会的地位向上、経済状況の改善、ひいては民族にとってのすばらしい未来は、民族の歴史を理解し、それを広めることによって確約されるという、現代中国における「民族文化」解釈を、とても忠実に内在化させているのである。H氏に、伝統文化の担い手としての強い自

負が感じられるのは、このような理由によるのだろう。

そしてそれは、個人的な利益のためではなく、民族全体の輝かしい未来へとつながる事業であるとされるため、それを金儲けと結びつけるべきではないと信じているのである。そのため、館は非営利組織としての体を取っている。言い換えると、非営利の運営を可能にしているのは、現代中国における「民族文化」への解釈が、地方社会の隅々にまで浸透していることであるといえよう。

しかしながら現実には、経営は芳しくない状況に陥っており、細々としたサイド・ビジネスを展開している状況にある。それは、表向きは非営利を謳っていても、補助金などの国家からのお墨付きなしには成立しない現代中国における民族文化事業の実情をも物語っている。今後も、当初の理念を掲げていた H 氏自身の思惑を超えて組織が変わっていく可能性もあり、引き続きその動向を注視したい。

最後に、クリフォードの想定するトライブ博物館（クリフォード 2002: 146）との比較を試みたい。クリフォードのトライブ博物館における問題設定では、それらは、宗主国と植民地、大文字の歴史とローカルな歴史といった権力関係に基づいた、これまで展示される側だった者からの意義申し立てとしてとらえられていた。だが本稿が示した事例からは、これと異なる状況が明らかになる。

モン（あるいはミャオ族）も、長らく中国国家の「辺境」において相対的貧困な状況にあり、マジョリティである漢族との力関係においては常に下位に位置づけられる存在であった。しかし、民族文化への再評価にともない民間から新たに創出された自民族表象の場は、決して、従来の権力関係への対抗や対立を表明する場として存在しているわけではない。H 氏の取り組みからは、むしろ中国国家への歩み寄りがみられることが明らかとなる。そこには、国境を跨いで居住する蒙の結束や連帯感を促そうという姿勢を垣間見せつつも、現実には中国内での評価や補助金を得るために、国内における「民族文化」解釈に寄り添う H 氏の姿、および国家制度のはざまに生きる少数民族の姿が映し出されているようにも感じられる。

謝辞

本稿は、JSPS 科研費 16K16967 の研究助成、および南山大学 2017 年度パツへ研究奨励金 I-A-2 の助成にもとづく研究成果の一部である。

参考文献

晨 光

2003 「中国の企業博物館（上）——その社会環境と運営方法について」、中牧弘允・日置弘一郎(編)『企業博物館の経営人類学』、pp. 359-384、東方出版。

クリフォード、ジェイムズ

2002 『ルーツ——20 世紀後期の旅と翻訳』、毛利嘉孝ほか訳、月曜社。

兼重 努

2016 「無形文化遺産登録をめぐるせめぎあい——トン族大歌の事例から」、河合洋尚・

飯田卓(編)『中国地域の文化遺産——人類学の視点から (国立民族学博物館調査報告 136)』、pp. 21-50、人間文化研究機構国立民族学博物館。

Kubota, Sachiko

2007 “Planning the Local Museum: Anthropology and Art in the Post-modern Era,” *People and Culture in Oceania* 23: 53-72.

李 慧净

2005 『中国私人博物館発展問題浅析』、吉林大学碩士學位論文。

呂 濟民

2004 『中国博物館史記』、紫禁城出版社。

宮脇 千絵

2017 『装いの民族誌——中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』、風響社。

長谷 千代子

2016 「歴史の資源化と歴史意識——雲南省徳宏州の「果占壁王国」論をめぐる」、塚田誠之(編)『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』、pp. 459-483、風響社。

日本ミュージアム・マネジメント学会事典編集委員会(編)

2015 『ミュージアム・マネジメント学事典』、学文社。

櫻井 龍彦・阮 雲星・長谷川 清・周 星・長沼 さやか

2011 「(座談) 開発と文化遺産」『中国 21』 34: 3-28。

武内 房司・塚田 誠之(編)

2014 『中国の民族文化資源——南部地域の分析から』、風響社。

塚田 誠之(編)

2016 『民族文化資源とポリティクス——中国南部地域の分析から』、風響社。

尹 紹亭・顔 寧

2018 「生態博物館与博物館人類学」『原生態民族文化学刊』 3: 121-126。

吉田 憲司

2013 『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』、岩波書店。

曾 士才

2001 「中国における民族観光の創出——貴州省の事例から」『民族学研究』 66(1) : 87-105。

中共文山州委宣伝部・文山州文化産業発展領導小組弁公室・中共文山州委州人民政府接待処・文山苗族苗族自治州旅遊局(編)

2014 『遊遍文山』、雲南人民出版社。

参考ウェブサイト

文山新聞網「文山州举行非物質文化遺産日系列宣傳活動」

<http://www.ynws.gov.cn/info/1121/139571.htm> (2019年2月25日確認)。

硯山苗協「硯山苗族文化伝承保護館開館」

<http://www.ys-hmong.com/viewnews.asp?ID=1065> (2019年2月25日確認)。

中国非物質文化遺產網「中華人民共和国非物質文化遺產法」

<http://www.ihchina.cn/3/10377.html> (2019 年 2 月 25 日確認)。

Keywords

Culture of Chinese Minority, Representation, Management, Miao/Hmong, Yunnan province